



月刊宮司プレス 第二百三十六号

彦島八幡宮 宮司ニユース

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 令和七年十二月 三十日

◇宮司の柴田です。 前号で、「今年最後の発行」と宣言したにもかかわらず、今月二回目の発行となりました。 どうしても、来年の干支について触れたくて、筆をとった次第です。 宮司プレスは、いつもキャッチアップ、遅れの挽回が検討課題だったのですが、課題を克服しただどころか、とうとうアウトストリップ、一つ先を越してしまいました。 月刊宮司プレス第

二百三十六号の発行です。 従来は、新年に発行している社報「産土」に、宮司プレスの総集

編を掲載していましたが、諸般の事情により、今号より掲載を見送りました。 しかしながら、

ホームページでは、閲覧が可能ですので、紙媒体からデジタルに特化したこととなります。

とはいいいながら、限定十部ではありますが、令和七年の総集編を発行し、希望者にお分けしま

した。 ある愛読者からは、「本にしてください！」と、大変ありがたい、励ましのお言葉をたまわりました。 来年六月で発行二十年の節目にもなりますので、冊子の発行を視野に取り組みたいものです。

◇さて、来年の令和八年は、昭和以来では百一年、平成以来で三十八年になります。 来年の干支は、十干十二支の六十通りある組み合わせの四十三番目である、「丙午」です。 陰陽五行説に基づく干支の組み合わせは、「陽」と

「陽」、「陰」と「陰」の組み合わせで、「陽」と「陰」との組み合わせはございません。 したがって、百二十通りの組み合わせではなく、六十通りなのです。 「丙午」の「丙」は、十干の三番目で、「陽」であり、五行は火であります。 しかも、火のお兄さんでありますから、太陽の光熱、キャンプファイヤーのような、天まで焦がすような勢いのある火の働きの年廻りとい

うことになるのです。 もともとは「炳」(明らかという意味)が語源です。 草木がよく茂り、まさに、生命力が旺盛となり、姿や形が、まさしく、「炳」になっている状態を表しています。 「午」は十二支の七番目で、やはり、「陽」、五行でも「火」です。 午の語源は、杵(きね)のことです)で、突き当たる、さからう、さらには、交り合う、つらぬくという意味です。 草木が繁盛の極限を過ぎて、衰微の傾向が生じたことを表しています。 経済界では、「午尻下がり」といわれます。 それは、今年、陽気の力がみなぎり、物事が積極的に進展するのがありますが、衰微に対する備えも重要になってくるということではないでしょうか。

◇閑話休題、丙午は、陽と火が重なりますので、この年は、火災が多い年といわれます。 そんなことからか、丙午の年生まれの女性は、気が強いということになったのです。 不幸なことに、この陰陽五行説の陽と火の重なったことと

「八百屋お七」の話が、いつの頃からか結びついてしまいました。この丙午年生まれ女性は、御亭主を、あるうことか「食い殺す」とい

う迷信が、一人歩きするようになったのです。

前回の丙午は、昭和四十一年ですが、出生率が例年に比べると低くなっているのも、この根強い迷信のせいでもあります。

◇午年は、動物では、馬があてられています。

じつは、当宮には、「御神馬舎」が、東回廊の

端にございます。来年は、沢山の方から祈り

を捧げられ、頭を撫でられることでしよう。

御活躍を願い、御神馬とお部屋の大掃除をさせていただきます。左の写真のとおりです。



◇日本書紀には、月夜見尊が、保食神を殺められたときに、その保食神の頭から生まれたと

されるのが、馬と書かれています。神や貴人に捧げられる生き物として大切にされてきました。

平安時代初期の法律の細則である

延喜式には、雨を祈る祭りには黒毛の馬、晴れ

を祈る祭りには白毛の馬を奉獻すると書かれています。祭りにおいて、馬の存在は大きい

ものであったのです。さらに、農耕馬としても、農作業に長く深くかかわってもきました。

そのようなことから、田畑の多くの実りをも

たらしてきたのも、この馬の存在が大きかったといえるでしょう。

◇令和八年丙午年の干支にあやかり、「丙」の陽気ので、物事が繁盛繁栄へと導かれたいものです。そして、「午」の「突きあう」という対立や衝突という働きを乗り越えて、「交じり合う」、調和のとれた暮らしてありたいものです。

さらに、御神馬さんにあやかり、「五日一風

十日一雨」の穏やかな天候で、五穀豊穰の年

でありますよう願うものです。皆さんにとりましても、明るく清らかな良き年になりますようお祈り申し上げます。

◇十二月祭典行事報告

▼大注連縄奉製架け替え神事*十二月七日



▼大絵馬奉納奉告祭*十二月二十五日

